TICAD Ⅳへの問題提起
グローバル化と日本の役割

神戸大学大学院国際協力研究科

高橋基樹

2007年12月14日

＠FASID　BBL

(財)国際開発高等教育機構

1924年　孫文の日本への遺言

神戸高等女学校（現神戸高校）
で講演をする孫文　（右から２人目）

＜日本は西方の覇道の番犬となるか、はたまた、東方王道の干城となるか＞

（「大アジア主義講演」1924年11月28日　神戸高等女学校に於いて）

迫りくる2008年

- G8サミットとTICADの開催年の一致(93年以来)
  これは天佑か、それとも. . .
  いずれにせよ、重い外交課題: 備えは万全か

- TICADを取り巻く状況は何が変わったのか

- 日本なりの支援の方向性は･･･？

近年議論になっていること

1. 何故TICADを開くのか、何故アフリカ支援なのか、そもそも「国益」には関係ない国にODAを何故供与するのか、ODAの理念とは何か
2. ODAの量的水準をどのように考えるのか、「量から質へ」は実現されたのか、何が問題か
3. 「アジアの経験」についてどう考えればよいか、アジアの新興ドナーとどのように向き合うのか
4. 日本なりのアフリカ支援はどのように構築されるべきか

0. 南アフリカと日本

1990年10月30日　マンデラ氏の来日・

国会での演説

翌日朝日新聞朝刊

“「マンデラ氏ほどの人でも、この国に来ると経済援助要請が真っ先にきてしまうのだろうか。日本がそうとしか見られていないことはちょっと寂しい気がする」とある政府関係者は自戒を込めてつぶやいていた．．．”

0. 南アフリカと日本

歴史における罪、贖い、赦しの意味

ー「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目になる」（ヴァイツゼッカー独元大統領敗戦40周年演説「荒れ野の40年」より）

ー村山談話と植民地支配への謝罪

南アフリカにおける「真実和解委員会」

過去の罪の真実の告白、訴追の免除と和解

「自戒」は生かされたのか：
T（Y）ICADプロセスは日本のイメージと内実を変えたのか

- 1993年　TICAD Ⅰ
- 1998年　TICAD Ⅱ
- 2003年　TICAD Ⅲ
- (2008年)　TICAD Ⅳ

TICAD Ⅱの前と後

- ～1997年　日本のODAの「黄金期」
  1997年　アジア金融危機
  　　ＯＤＡ予算の収縮の開始

  1999年　拡大HIPCs救済スキームの発足
  　バーミンガム・サミットからケルン・サミットへ
  　「祝祭」による債務棒引きか、金融原則か
  　崩壊国家と破産国家の続出
  　「貧困削減戦略の時代」
  　　援助の調和化・アラインメントの潮流

TICAD Ⅱの前と後（２）

- 2000年～　アフリカの成長の「再生」？

- 2000年　　九州・沖縄サミット（アフリカ3か国およびタイの首脳が出席:先駆的試み）

　　「西方」と「東方」をつなぐ試み

　ミレニアム開発宣言

FOCAC（中国・アフリカ協力フォーラム）閣僚会合

- 2001年　　米国の同時多発テロ

　　外務省とODAの危機の顕在化・・・

TICAD Ⅱの前と後（3）

- 2001年　NEPADのOAUによる採択
  （TICADのNEPADへの影響？）

- 2003年　TICAD Ⅲ　（落合氏によるTICAD不要論）

- 2005年　グレンイーグルス・サミット
  アフリカへのODA倍増、年間500億ドル積み増し、国際機関（IDA・IMF・ADF）への債務の減免へ

- 2006年　FOCAC北京首脳会議

TICADとサミット

- 日本のアフリカ援助ばかりでなく、ODA政策全体が、G8サミットの決議事項、それへの対応によって大きく左右されてきた

- 逆にTICAD（2008年5月）によってサミット（7月？）を動かすことができるか（1993年とは逆）

  アフリカ諸国による強い支持と、現実に対応した明確なメッセージの必要性

何故対アフリカODAか

- 参議院ODA特別委員会(2007年2月27日)

における犬塚議員の発言

「私どもも、(中略)選挙区で(中略）ODAの話と言うのは非常にしにくい。選挙には何しろプラスにはなりようがない(中略)、特にシャッター街と化した商店街の中で一生懸命苦労しておられる人たちに対して、見たことも聞いたこともない国に対して血税を使わなきゃいけないということを説得するというのは大変難しい作業．．．」

何故対アフリカODAか(2)

- 参議院ODA特別委員会(2007年3月14日)における意見陳述

営利追求活動により生ずる経済のグローバル化の下で「日本人という集団が他の人々の問題にどれだけ深い理解を持ち、近視眼的な利益を超えて心を寄せるのか・・・(中略)それは、日本人の品位、知性、そして感受性の問題」「そうした形でほかの人々と共感を持って行動することが日本人自身の広い意味での安全保障になる」

何故対アフリカODAか（3）

- 続く参議院同委員会（2007年3月22日）での高野議員(当時)の発言

「僕は、ちょっと、ちょっと待ってくださいよと・・・(中略)日本という国は金が幾らでも余っている慈善団体ではありませんから、税金に基づくODAという限られた予算の中で国家の存在があり、意思があり、戦略があるわけですから、人間としての共感だけで援助ができるわけではないと思うんですね。」「そもそも今のようなアフリカになってしまった原因はどこにあるのか(中略)第一義的にはヨーロッパがやるべきじゃないのか・・・」

何故対アフリカODAか（４）

- 続く参議院同委員会（2007年3月22日）での麻生外務大臣(当時)の回答

アフリカの経済状況について「知っている方もほとんどいらっしゃらぬというのが現実だと思っております。」「そういうことを知らずしていきなりやるのは極めて、これまた、おまえ何も知らないじゃないかという話になるんであって、私どもとしてはそこらのことをよく学んだ上でいかなきゃいかぬというのは事実であろうと、私どももその点に関しましては全く意見は同じにいたしております」

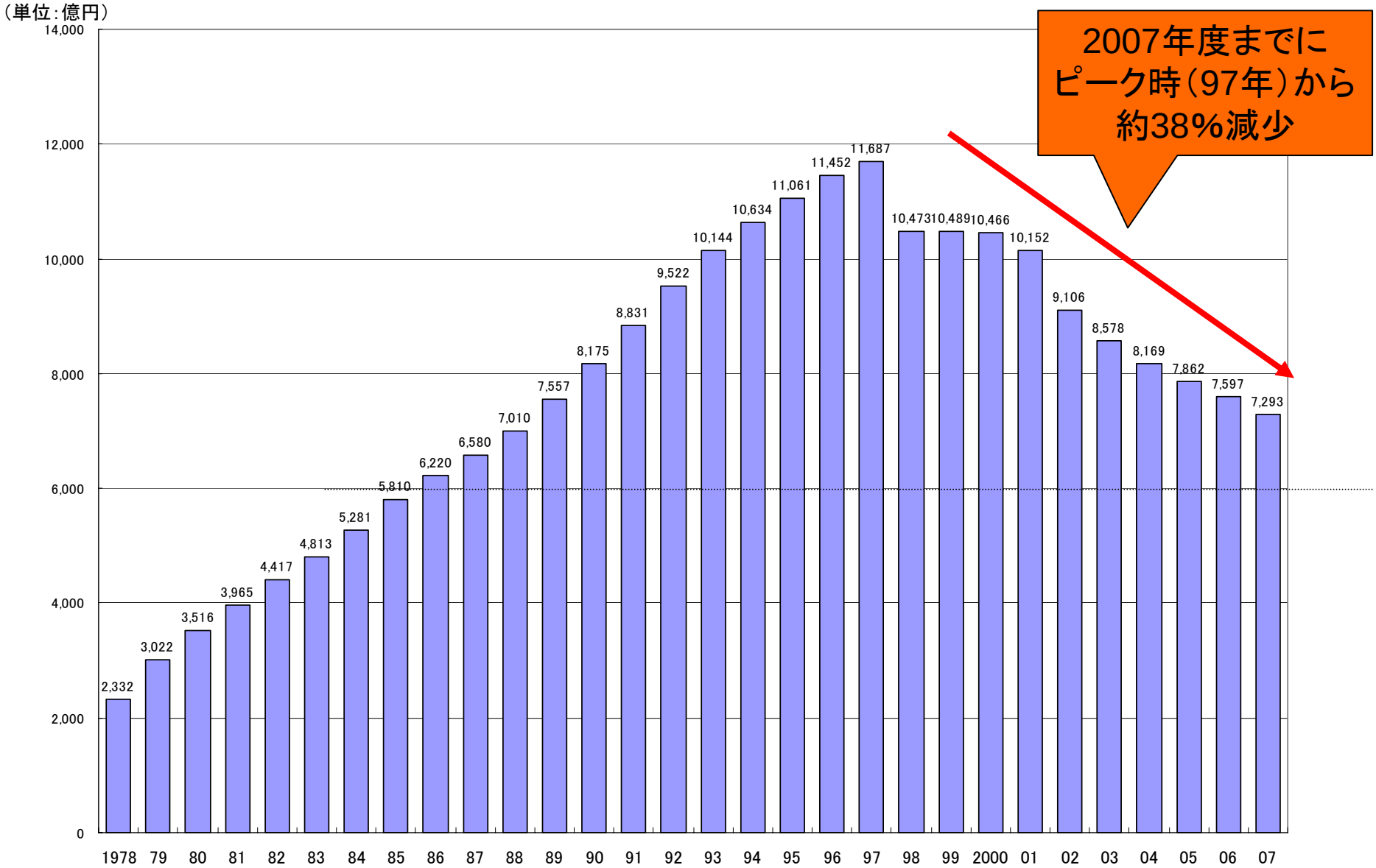
さらに、いくつかの論点

- 「シャッター街」で、「赤ちょうちん」で、市民講座でどうアフリカへの援助を語るのか
- 一義的な責任はヨーロッパ？
  - 植民地支配をしなかった国は？
  - 植民地支配と援助の関係をどう考えるのか
  - 将来への一義的な責任はアフリカにこそ
- そもそも、われわれはアフリカについては無知で、アジアのことはよく知っているのか？
- 無知で補助的な責任しかないとすれば、TICADプロセスとは一体何だったのか

対アフリカ支援の量と質

- 倍増と100億ドル積み増しの公約
- 縮む一般会計、無償、技協の全体量．．．他方で全体として順調に返済される円借款．．．
- 借款援助主体のアフリカ支援へ？

一般会計ODA予算の推移　（1978―2007）



外務省国際協力局資料より

対アフリカ支援の量と質（2）

- 国際公約は果たさなければならない
  　しかし、条件が整わなければ、大量の援助が必ずしも受入国にとって望ましいとは限らない　←　援助は吸収されなければ開発効果をあげ得ない
  　開発効果があがらなければ、正当性を喪失

- 国際的な潮流における援助改革への志向性の理解の必要

対アフリカ支援の量と質（3）

- 外交上の要請と開発上の要請とを区別する必要：調和化・アラインメントの理解と対応の必要性—「顔の見える援助」論を超えて

- プロジェクト型援助の功罪を踏まえること
  良質の安全なインフラ等を建設することは絶対に重要。しかし、定義上プロジェクトは特定の目的を果たすために行われる。それだけで全き開発活動にはなり得ない

対アフリカ支援の量と質（4）

- 円借款が重要なツールとなるとして．．．
  インパクトと自立発展性をどのように確保するか
  　マクロ的な観点の債務持続可能性に加えて
  　案件のmaintainabilityの向上
  　高いmaintainabilityの社会的な必要十分条件とは何であるか、考察が必要

- 新JICAの「統合効果」を無償と円借款に生かしえるのか
  上記の課題に現地JICAは対応できるのか

対アフリカ支援の量と質（5）

- ODAとその他の支援ツールの分業と協業
- ODAへの過剰な期待と多目的化を排す
- 開発は公共政策と民間活動の組み合わせによってのみ起こる：民間の貿易・投資促進、「国益」実現支援にふさわしい支援の総動員を

対アフリカ支援の量と質（6）

- TICADプロセスから、開発のプロフェッショナルな議論を行う専門家会合を派生させられないか
- 特に非ＯＤＡの仕組みについて、アフリカ人とその他の人びとが論じ合う国際フォーラムを結成できないか
- 新ＧＣＡ（New Global Coalition with Africa）の結成を

アフリカを前にして、アジアとどう付き合うか

- 「アジアの経験」vs.「アジアでの経験」
  日本の経験を移転し、吸収したのは誰か
  われわれは本当にアジアのことをよく知っていたのか（そうではなく、アジアが日本のことをよく学び、盗んだのではないか）
  援助国と受入国が同じ地域にあったことの幸運

- 開発の観点から、日本の経験を最初に学んだのは誰か

アフリカを前にして、アジアとどう付き合うか（２）

- 覇道を歩む中国？

　新興ドナーとしての中国と北京コンセンサス？

　人権・民主主義・環境に関わる政策条件のすり抜け：欧米に募る警戒感

　不透明な援助額(ＯＤＡの概念を持たない？)

　ダルフール危機と北京オリンピック

アフリカを前にして、アジアとどう付き合うか（３）

- <u>ターボ・ムベキ　南ア大統領の警告</u>
  (2006年12月14日－FOCAC北京サミット後－)

「もし、中国の製造業製品を輸入し、アフリカは中国に一次産品を輸出するだけだとすれば、アフリカ大陸は、低開発に追い込まれるだろう」「それは、端的に旧宗主国との植民地的関係を再現することだ」

アフリカを前にして、アジアとどう付き合うか（４）

- <u>金大中元韓国大統領の発言</u>

「日本は経済大国になりましたし、国連でも最も大きな負担をしている国です。世界の途上国への援助も非常に大きい。そういう点は、私は高く評価すべきだと思います。」「日本は目をもっと世界全体に向け、道徳的に尊敬される国になっていくべきなのに…(後略)」（『世界』2008年1月号）

2010年　DAC加入へ（韓国の先進国化が完了）

アフリカを前にして、アジアとどう付き合うか（5）

- 「パリ宣言への対応のあり方を日本に学ぶ．．．」
  (2007年9月　中国側研究者の発言)

  中国の脆弱性

  　実はグローバルな秩序の中での孤立の危険性を感知している国：パリ宣言への署名
- TICADプロセスと東南アジア諸国(インドネシアとマレーシア)
- 中国とインドの双方を含むAsian Coalition with Africaは日本にしか作れない（「東方」と「南方」をつなぐために）

TICAD Ⅳのアジェンダ案(既述)

<u>日本のコミットメント</u>

(1)援助の量と質

(2)非ODA資金協力

(3)貿易投資支援

(4)官民パートナーシップと環インド洋圏多極間協力の強化

(5)アフリカの自助努力の顕彰

(6)平和構築支援

TICAD Ⅳのアジェンダ案(既述)

<u>全体的決議事項</u>

10周年宣言の精神の確認と継続

- 「リーダーシップと国民参加」(人権と民主主義の強調をこそ日本のイニシアティブで)
- 「平和とガバナンス」(非核地帯化と武器流通の制限こそ)
- 「人間の安全保障」(人間としての共感から)
- 「アフリカの独自性と多様性、アイデンティティの尊重」

TICAD Ⅳのアジェンダ案(既述)

<u>全体的決議事項</u>

(1)アフリカ諸国による自助努力の責務の再確認

(2) 持続的な経済成長・貧困削減のための基盤（上述の3っつの資本）の構築および、経済成長と貧困削減の循環の形成

(3)新しい「アフリカとのグローバルな連帯（New GCA）」、そのアジア版(ACA)の創設

(4)アフリカの環境と資源の持続的利用

結論（1）
TICADプロセスの日本にとっての意味

- TICADプロセスなしに、現在のアフリカとの外交･開発の対話の回路は作りえなかった＝「日本にとっての貴重な資産」（外務省某高官の発言）

　もし、制度疲労が生じているのだとすれば、強いメッセージとフォローアップにより再活性化を図る必要あり　そうでなければG8サミットを動かす力にはなりえない

結論（1）
TICADプロセスの日本にとっての意味

- TICADプロセスなしに「アフリカ日本協議会」も「TICAD市民社会フォーラム」も成立しえなかった

　たとえ、5年に1度の機会であろうともアフリカへの関心を集める他にない機会ではある：最大限に生かす必要

結論（２）
日本なりのアフリカ支援は如何に構築されるべきか

- 覇道の20世紀から協調と共生の21世紀へ

　過去に向き合うこと、植民地支配を謝罪することの重み　⇒　21世紀の地球社会においては、さまざまな覇権と力関係の非対称が解消されていかなければならない

　民主主義の促進においても．．．

結論（２）日本なりのアフリカ支援は如何に構築されるべきか

- 共生の基盤としての平和の尊さのために
  - 平和主義の生み出したもの
    - 非核三原則
    - その他大量破壊兵器への反対
    - 武器禁輸三原則
  - 被爆と赦し
  - アフリカ非核地帯化条約の推進へ
  - 人間の安全保障と平和主義

結論（2）
日本なりのアフリカ支援は如何に構築されるべきか

- 開発援助を通じて実現されるべきものとは何か
  問われているのは、日本のあり方そのもの
  政府に何かをしてもらうのではなく、政府を通じてすぐれた何かを実現しようとすることの乏しさ(日本の戦後政治のある側面の反映．．．)
  マンデラ氏の日本観、金大中氏の日本の援助観をどう考えるのか:それは国益と無関係なのか

結論（２）
日本なりのアフリカ支援は如何に構築されるべきか

- 日本なりのメッセージを込めたアフリカ援助を再構築することができるか

　高齢化と財政逼迫、経済規模の相対的低下を受けて．．．

　「叡智と理念の援助」へ

　点よりも社会全体を、経済全体を支援する援助へ

ご清聴ありがとうございました

神戸大学国際協力研究科
高橋　基樹